

東日本大震災学習支援ボランティア学生 座談会



「大教生は被災地で何を学んだのか？」～成果が多かったボランティア派遣～

大阪教育大学は、7月30日(土)から8月5日(金)の1週間、東日本大震災で被災し、授業が遅れている中学生や高校生を支援するため、“教師の卵”である学生31人をボランティアとして宮城県内の5校に派遣しました。被災地の学校では、夏休みの補習や自習補助など、主に数学や英語を中心に生徒の学習活動をサポート。学生たちは「子どもたちと交流し、先生としての在り様など、多くを学んだ」などと感想を述べており、たくさんの成果を得ることができました。座談会では、リーダー的な役割を担った6人の学生に体験談や思いを話していただきました。(広報室)

学習支援に引き付けられ

司会 みなさんは、新聞記事、大学生協で配布されたチラシ、ホームページなどからボランティア募集の情報を得たということですが、なぜ行ってみようと思ったのですか。また、学習支援のボランティアについて、どのように捉えていましたか。

神原 何か自分が力になれることはないかと思っていたところ、学習支援であればやれるのではないかと思いました。

秋山 被災地の道路などにあるがれき撤去はニュースでも見ていたのですが、学習支援はメディアでもあまり報道されていなかった。自分が大阪教育大学の学生だということで、教育に関することにかかわることができるのではないかと思ったからです。

船迫 学習支援は自分たちだからこそできる

ボランティアだと思ったからです。

津波の被害、目の当たりに

司会 学習支援ボランティアという中身自体にも引き付けられ、参加のきっかけになったということですね。ところで、被災地に足を踏み入れて、どのように受け止めましたか。

上田 わたしは、被災地に行ったからには現地の様子を自分の目で確かめようと、他のボランティア学生4人と一緒に、午後の空いた時間を使って石巻市内に足を踏み入れました。そこでは商店街が閉まっている、水があふれかえり家の中がぐちゃぐちゃになっている、船が陸に乗り上がった状態のまま、家の土台だけが残っている、そういった状態を目の当たりにして衝撃を受けました。しかし、何もできないもどかしただけが残りました。

船迫 わたしたちが派遣された大和町の中学

校は内陸部にあったので、津波自体の被害がほとんどない状態でした。宮城教育大学の方に七ヶ浜と荒浜に案内していただき、様子を見てきました。七ヶ浜に行ったとき感じたのは、津波のすごさです。わずか数10メートルの差で、被害を大きく受けたところと、全然被害がなかったという違いがあちこちにありました。

津波の被害を受けたところは、家の土台だけを残してさらわれてしまっていたり、子どものおもちゃが落ちていた状態でした。今まで普通にあった生活が、一瞬にして奪われてしまったことが、実感として迫ってきました。

津波の被害を受けた海岸近くの子どもたちはもちろん、大和町という内陸部に暮らして、津波の被害を受けていなくても、地震に遭った日に、家族を始め大切な人やものをなくすなどそれぞれのつらい経験をもっています。一人ひとり、事情が違うのだと考えさせられました。

出席者(敬称略)

秋山 雄介(第二部小学校教員養成5年課程5年)…亘理町立達農中学校派遣

上田 瑞歩(学校教育教員養成課程英語教育専攻[中学校コース]2年)…亘理町立達農中学校派遣

胡本 義宏(学校教育教員養成課程英語教育専攻[中学校コース]2年)…東松島市立矢本第一中学校派遣

神原 啓祐(小学校教員養成課程理数・生活系[数学コース]4年)…宮城県立本吉響高等学校派遣

下田 恭平(大学院国際文化専攻[言語文化コース]2年)…大和町立大和中学校派遣

船迫 佐織(教養学科文化研究専攻[社会文化コース]4年)…大和町立大和中学校派遣

司会…野田 文子副学長



野田副学長(司会)

司会 学習支援をして、子どもたちの印象はいかがでしたか。また、支援に当たって心がけていたことはありますか。

秋山 大人しいが芯は強いという感じがしました。地震や家族のことなどをできるだけ触れないように話をしようとしていました。

胡本 ぼくも、同じです。学校に来ているのは、勉強をするためですから、子どもたちができることを最大限お手伝いしてあげることを一番、念頭に置いていました。

机間指導で自学自習をサポート

司会 では、どのような学習支援をしていたのかを教えてください。

秋山 わたしは上田さんとは同じ逢隈中学校で活動していました。主に中学3年生の英語と数学を担当しました。内容は、学校からの宿題、自分たちが持ち込んだ教材の学習を各自で進めているところを机間指導してきました。

司会 子どもたちは熱心でしたか。

上田 熱心でした。私語もあまりありませんでした。

胡本 ぼくは東松島市立矢本第一中学校でした。宮城教育大学の学生と計10人で指導に当たりました。ぼくは3年生を見ていたのですが、熱心でした。受験を控えていることや、大阪から来た知らない人が見ているという緊張感もあって、最初の頃は静かで、友達同士聞き合うこともなく質問もほとんど出なかったです。打ち解けてきたら少しずつ質問は出てくるようになりました。1学年(希望者40~50人)を2クラスに分けて、1チーム20人あまりの生徒を学生が見ていました。

神原 ぼくは気仙沼市内の高校(宮城県立本吉響高等学校)に行き、5人の学生で学習支援をしました。生徒は、4年制大学や専門学校に進学したい、就職したいと一人ひとり進路や目標がばらばらでした。そのための過去問題や一般常識の問題集を解いて就職試験に備えたり、夏休みの宿題を取り組んだり、それぞれのやりたいことを優先した活動でした。希望制で、やってくる生徒



神原 啓祐

は多くても1日15人程度でした。マンツーマンに近い日もありました。

数学、国語、英語がメインと言われていましたが、理科や社会科も聞かれ、できるだけ対応しました。4日間いましたので、一人ひとりとのコミュニケーションが密になってきて普段の生活のことも話してくれるようになりました。

難しかったが学ぶことが多かった

司会 勉強以外にも様々な話をしてくれたということは、生徒との信頼関係ができたということですね。いろいろな教科を教えることになったということですが、対応はうまくできましたか。

神原 努力しました。ひとりの生徒が就職試験を受けたい企業の過去問題で元素記号・原子番号を覚えなければいけなかったのです。図書室で資料を調べたりして、一緒に勉強の仕方を考えました。

司会 難しかったけれど、学ぶことが多かったそうですね。授業だったら事前に用意できますが、今回は向こうがやっていることをサポートするのですから、何が出てくるか分からない難しさがあったと思います。

船迫 わたしと下田さんは大和中学校を担当しました。大和中学校は、津波の被害をほとんど受けなかった学校です。支援の内容は、学校が設けたサマースクールに参加したい生徒だけを対象にしています。指導方法は自学自習を机間指導でサポートするという形でした。

生徒たちはすごく元気で活発でした。質問もいっぱいでした。そのうち、勉強とは関係のない大阪の話題が出てきました。1年生が20人いたのですが、勉強熱心で明るく楽しく賑やかに勉強のお手伝いをさせていただきました。



船迫 佐織

教えることの手応えを感じた

司会 生徒からの質問内容はどうでしたか。

船迫 手が止まって分からなくなっているところや、一学期の復習などです。

下田 ぼくの担当は3年生でした。初め、生徒たちは正直言って元気がなかったです。英語指導で入ったのですが、クラスの9割の生徒が数学で、残りが英語と理科と社会の指導でした。数学も学校の教材ではなく、生徒が持ち込んできたテキストでしたが、レベルが高くて、正直教え方が分からないところもありました。

司会 「ああ、ここが分からないのか。ここをこう教えれば分かってくれるのか」といった、手応えを感じることができた瞬間はありましたか。

神原 ぼくは高校の数学を教えたのですが、夏休みの宿題のテキストをみても、答えしか書いていなかったの、生徒には難しかったようでした。この答えになるのは「中学校でこういうことをやったからこうやねん」と、過程を説明してあげると、「ああ、なるほど、そうなんだ」と喜んでくれたことで、教えるポイントをつかむことができたように思います。

司会 そういう経験は、人に教えようという意欲の高まりにつながると思います。

神原 指導が後半になると、国語、数学と夏休みの宿題をやり終わって、子どもたちが「先生が来てくれたからできたわ」と、「やったあー」といった顔をしてくれて、すごく嬉しかったです。

最後の日、互いに別れを惜しむ

司会 子どもたちが「やったあー」って言うてくれる顔ってたまらないですね。初めと終わりの生徒たちの変化はいかがでしたか。

船迫 初めに、「大阪から来ました」と自己紹介すると、目がテンになっていました。「えー、そうなんだ」と。初めは、互いに距離感がありました。わざわざ大阪から来たの?といった具合に。

でも、最後の日にお別れのあいさつをして宿舎へ帰るバスに乗り込んで、走り出したところを、生徒たちが後から追いかけてきたのです。「先生、さよなら!」って声をかけてくれました。5日間という短い期間だったけれど、子どもたちとの信頼感とか、精神的なつながりができていたように感じました。

下田 最後のお別れの日に生徒から寄せ書きの色紙をプレゼントしてもらいました。メッセージという形でみんなからひと言が書かれていました。

わたしたちの足跡を形に残したかった

船迫 わたしたちが企画して生徒全員を集めてお別れ会を行いました。

司会 それはどういう趣旨で行ったのですか。

下田 わたしたちの足跡を形として残したいという気持ちでした。子どもたちを教える立場でしたが、教わることの方が多かったというお礼も込めました。そのお別れ会で一人の学生が踊りを披露したのです。その人は大和中学校でボランティアした大教の学生グループの一人です。衣装も大阪から持参したものです。子どもたちを励ましたいと、やる気満々でした。

司会 子どもたちの反応はいかがでした。

下田 子どもたちはびっくりしていましたが、

感動し、喜んでいたと思います。わたしたちの思いが伝わったのかなと感じました。

司会 すごく印象の残るお別れ会だったようですね。

船迫 子どもたちが自主的に5日間学習してくれて、最後に、学生たち一人ひとりがみんなの前で話をしましたが、じっとわたしたちの話に耳を傾けてくれました。何か子どもたちの心の中に残るものがあるといいなあと感じました。

司会 自分の中に強く残るものがあれば、相手の中にも残るものがあります。素晴らしいことですね。

船迫 5日間という短い間だったけれど、みなさんに逢えることができたことは幸せです。現地の人が落ちついて大阪に行けるような状況に早くなってほしいという思いを話しました。子どもたちは「大阪ってどのようなところだろう」とか「このまま大阪に連れて帰ってよ」とか、「来年も(ボランティアに)来てよ」とも言われました。

大阪って面白いー! 楽しい!

司会 子どもたちが別れを惜しんでくれたことについてどのように感じましたか。

下田 日頃は、感情を表に出さない子どもたちが、最後の日にお別れ会をしたことについて、ぼくたちが思っていた以上に、子どもたちの心の中に深く残るものがあったのかと感じました。

司会 他に、心に残るエピソードはありましたか。

上田 逢隈中学校では、最後の授業が終わった後、記念写真をみんなで撮りました。

いつまでも教室に残ってくれ、別れがつらくて泣いていた生徒もいました。わたしももらい泣きしてしまいました。

司会 短い期間なのに別れは感動的だったのですね。みなさんは、初対面なのにすぐに打ち解けたみたいですが、なにか秘訣はありましたか。

上田 大人しい生徒でしたが、大阪人のわたしたちが、頑張って気さくに接したので、心を開いてくれたのではないかと思います。関西弁に子どもたちは怖気付いてしまうのではとも思いましたが、あえてがつがつ、こてこてに行くと、思いの外、食いついてきてくれました。

司会 子どもたちは、勉強は教えてくれるし、大阪から来た学生さんは面白かったし、楽しかったのだと思いますね。

神原 生徒たちはみんな大阪に対する興味・関心をもってくれました。乗りとかぼけ・つつこみの大阪文化を、仲間の学生ボランティアと漫才風に見せたのですが、素直に「面白い!」って言うてくれました。とにかく顔がほころんでくれたのが嬉しかったです。それだけでも行った意味があったなと思いました。

生徒から多くを教えられた

司会 学習支援を通して心のつながりができたというのは、ボランティアのみなさんにとっても大きな成果だと思います。将来、教師になった時、この経験は必ず生かされると確信します。経験をとおして自分の中に変化があり、教育観が変わったなという方はいらっしゃいますか。

秋山 一人ひとりをつかむことができたのか



下田 恭平



秋山 雄介





上田 瑞歩

なと思います。初日より2日目、3日目と「ああ、この子は数学のこの部分でつまづいているのかな」と気づくことができるようになりました。ですから、机間指導中にちょっと手が止まっていたら、こまめに「大丈夫?」って声をかけをすることができたように思います。

上田 今回、被災地に1回行っただけでは、すべてをつかむことはできないのですから、継続的に行動することが大事だと強く感じました。

胡本 小学校1年生の時に阪神・淡路大震災を尼崎市で経験しました。今回の震災を自分の目で見、あれから15年経って日本がどのように変わったのだろうと確かめたいと思ったのがボランティアのきっかけです。現地の人、地震だけだったら建物はまったく丈夫に残って住むことができたのではないかと言われていました。しかし、津波に流されたところは使えないのがほとんどでした。津波への防災対策が求められていると感じました。

強い日本をつくる強い子どもを

司会 震災について、みなさんは非常に大きな視野で見てくることができましたね。子どもたちと接してなにか感じましたか。

胡本 やはり怖い経験をしてショックを受けたというのはあります。でも、心の中にある恐怖から立ち直っていったという自信をもてるようになればいい。その点、子どもたちというのは、ぼくらが思っているより強くなっていくのではないかと確信します。そういう意味では、つらいけれど乗り越えていかなければならないと思います。

司会 胡本君はそういう指導ができる先生



胡本 義宏

になっていこうと考えているのです。

胡本 そうです。勉強だけでなく、強い日本をつくることのできる子どもを育てていく教師になりたいと思っています。

神原 本吉響高校は高台にあったため校舎もグラウンドも無事だったので、周辺の高校で校舎もグラウンドも流された部活の子どもたちが、本吉響高校に施設を使わせてもらいにやってくるのです。ですから、練習は人が多くて狭かったのですが、生徒たちはそれでも、自分たちにできる最大限のことは何なのかと考えていました。それを見て、「すごいなあ」と思い、無いものを嘆いても仕方がない、自分が置かれたところでいかにがんばるかという姿勢を、被災地の生徒たちから学びました。

大阪に帰ってからも、陸上を指導している母校の中学生に、足りないことを嘆くのではなく、今あるもので何ができるのかもっと考えようと呼びかけました。大阪の中学生もそういうばくの話をよく聞いてくれました。そして、こうしたらどうだろうと、子どもたちからも積極的に案を出してくれるようになりました。

子どもたちに安心できる場を

司会 被災地のボランティアを経験したことで、強い子どもを育てようとする意識が芽生えましたね。

船迫 わたしは、教師になって今回の震災のことをいろいろ伝えていかなくてはならないと感じています。マスコミだけだと、どうしても偏った報道になってしまいます。テレビのニュース報道には映っていないところから確かめていかなければならないと思っています。自分で見えて感じて学んだことを伝えていこうと。

被災地に行く前、子どもたちは落ち込んで笑顔は少ないのかなと考えていましたが、実際に接してみても子どもたちは強いと感じました。子どもたちから笑顔もらって自分たちも笑顔になり、元気のエネルギーをもらった気がします。



学習支援ボランティア

それで、自分が教師になった時にどのようにしていかないといけないのかなと考えたときに、震災がおきたときだけではなく、日常的に生徒が安心できる空間を作らないといけないと強く感じました。被災地の子どもたちは、不安の中で非日常的な生活を過ごしています。それでも、先生の役割というのは大きいと思いました。というのも、わたしたちが自学自習の机間指導をしているところに、時折、担任の先生が教室に入ってくることもあり、先生の顔を見ると子どもたちはすごく安心した表情になるのです。こういう子どもたちと先生の信頼で結ばれた関係づくりができていたら、非常事態があっても、できるだけ日常生活に近づけてやれるのではないかと感じました。安心できる場というのは子どもたちにとってとても大切なことだと感じました。

学校がもつ役割の大きさを痛感

司会 学校って、子どもたちにとても大切なところだということを、みなさんは改めて感じたのですね。学校と先生と子どものつながりの大切さ、学校教育の意義まで学んでこられたのではないかと思います。学校っていろいろな役割を担っているのだと改めて感じます。

下田 教師をめざしている以上は、第1に今回の体験を伝える義務があると思うのです。わたし自身は小学校低学年のときに阪神・淡路大震災を目の当たりにしたのですが、今の子どもたちはテレビなどのメディアでしか東日本大震災を知りません。これから地震大国・日本に住んで行く以上は、わたしたちが目目の当たりにしたことを大阪の子どもたちに伝えていく使命があると思います。それと指導の中で思ったのですが、宮城の子どもたちは大阪の子どもたちに比べて大人しかったので、こちらから積極的にコミュニケーションをとっていくことを心がけ、心を開くことができましたので、大阪でも実践していくことが重要かなと感じました。

司会 声かけの大切さですね。教職の根源的な部分から、教育指導におけるポイントの技術まで、みなさんは幅広く学んでこられたようです。学習補助なら本学の特性を生かした支援ができるのではないかとこ



ティア全員で

とでスタートしたのですが、行ってみたら、みなさん自身も先生についていろいろと考えることができたようです。ボランティアに対するみなさんの真摯な意識や考え方も聞かせていただきました。大学として、これからもボランティアを派遣していきたいと考えています。

被災地ボランティア 学生へ



理事
木立 英行

座談会(1～5面掲載)では学習支援活動について多く語られていますが、同行したわたしはほとんど初対面の皆さんが他大学生との交流も図り、一週間の間に良いとはいえない環境の中で共同生活を作り上げたことに、皆さんの力量を感じました。わたしが同行した気仙沼に派遣された諸君は、災害で失われた生徒の就職先を開拓するために極めて多忙となった先生たちの手助けを乞われたのですが、他も学校も同じようなものであり、教師をめざす諸君は考えるところがあったと思います。教育以外の面で学校教師に期待される役割を改めて実感しました。

復興の兆し、著しい被災地で見た気力、知力、体力を振り絞って再び立ち上がろうとする人々の姿をわたしはこれからも忘れないと思います。皆さんも将来、挫けそうになったとき、きっと同じ姿が思い浮かぶのではないのでしょうか。わたしにとっても様々学ぶことの多い一週間でした。31名の皆さん、ご苦勞様でした。ひと回り大きくなった皆さんの今後の努力と活躍を期待しています。(現地での学生指導等担当)

ひと 最前線

002



教育学部教養学科数理科学講座
教授 宇野 勝博さん(53歳)
(附属天王寺中学校長
附属高等学校天王寺校舎主任)

数学の面白さは コミュニケーション

■ 今春、附属天王寺中学校長、附属高等学校天王寺校舎主任に就任しました。さぞや激務に喘いでいるかと、研究室を訪ねました。「附属は行事が多いし、保護者、同窓会との交流が盛んですから、確かに仕事は格段に増えました。でもなんとかこなしています」と屈託がありません。ストレスはどのように解消されているのですかと突っ込むと、「ぼくはスポーツが全くだめ。趣味らしい趣味もありません。校長室のソファでぼーと考えにふけるだけで癒されています」と、うまくかわされました。

■ 算数・数学との出会いを尋ねると、「小学校時代、算数が他の教科に比べて特に好きだったということはありません。進路選択で、大学で学ぶのは英語か数学かと悩んだ末、数学を選びました。数学の楽しさを教えてくれた高校時代の先生の影響が大きいと思います」

■ 話題は子どもたちの“理数離れ”に。学生の間では数学が嫌いな科目ナンバーワンとして見られていますが、小学校低学年ではむしろ好きな科目の中に算数が入っています。「数や図形に対して考えを進めて、1つの結論を出すことは面白いし、喜びを感じるはずですが、しかし、高校受験、大学受験と近づくにつれて、数学が記憶の学問になっていくところに、数学嫌いを生み出している背景があるといいます。教師も、受

験をクリアしてほしいとの思いから、ありとあらゆるパターンの問題を生徒に与えようとするので、たくさん問題をこなすことが日常の勉強になってしまいます。

■ 「問題集と正解資料があれば、その問題について学習したことになるかもしれないが、生徒は、正解を渡されても早く〇×をつけて次の問題に進まないと、次から次へとやってくる問題に対応しきれない。先生も生徒も余裕をもてなくなっているのではないのでしょうか。数問でもよい。生徒と向き合い、解答の細かいステップを確認の方がよほど教育的だと思うのです。教師も生徒も、なぜそういう解答方法をとるのか、なぜそう考えるのか? 「なぜ」と「なるほど」をかわしながらのコミュニケーションによって数学の面白さも増すといえます。

■ 日本数学会では、教育問題を扱う委員会の副委員長を務めています。大学での研究と教育、附属学校の運営にと忙しい日々は続きそうです。

略歴

- ・1958年神戸市生まれ
- ・大阪大学理学部数学科卒業
- ・同大学大学院博士課程単位取得満期退学、イリノイ大学大学院博士課程修了
- ・現在、大阪教育大学教養学科数理科学講座教授
- ・専門は代数系の表現論



本学を卒業して5年以内の現役養護教諭と、学生(4回生)が実践交流を通して共に学ぶ「第2回卒後研修会」が、7月30日(土)、天王寺キャンパスで開かれました。(写真下)

企画したのが北口教授です。「養護教諭はほとんどが各校に1人配置であり、研修・情報交換・交流する場を提供してあげたい。さらに、4回生はキャリア教育の一環として自分の養護教諭像を描いていく場としたい」。この熱い思いが、昨年、「第1回卒後研修会」として実現しました。卒業生が参加しやすいように毎回夏季休業中の土曜日に設定され、第2回目の今回は、約90人が参加して、「学校事故の対応」について弁護士から学びました。

「ひとりの素晴らしい教諭がいても学校はすぐには変わらないが、養護教諭が素晴らしいと学校は変わります。学校の要(かなめ)の役割を果たしているからです」。北口教授は、日頃の授業で学生たちにまずこの言葉をかけるとのことです。学生たちは「えーっ」と驚きます。養護教諭という職業がどれだけ重要なのか、まず基本的な認識をもってもらいたいからだといいます。

養護教諭は外から見ると、とくくらくな職種のようにみられがち。「そうではない」ときっぱり。授業では、他にも養護教諭のあり方を折に触れ語りかけます。例えば「ピンの養護教諭に」「教育の土俵で勝負ができる養護

教諭に」「“自家発電”ができる養護教諭に」なりなさいと。

「ピン」とは文字通り、「ピンからキリ」から取った用語で、「1番」(トップ)の意味です。「ピン」とは「ひとり」という意味もあり、「ひとりであっても多様な役割をこなし、解決していく専門職に」という気概が感じられました。

また、「ひとりだからこそ教職員や関係する専門家とつながってほしい」とも説きます。学校事故や心身の健康問題への対応、さらに

保護者からの相談など、多くの人々との連携なくして解決できない問題が増えているからです。そのためには、日頃から教職員との細やかな情報共有が必要だといいます。

「養護教諭の役割は多様ですが、基本はまず保健室の仕事ができることです。養護教諭として専門性を発揮し、周りの信頼感を築きあげることが第一です。そして、子どもたちから把握した健康問題を、学校全体で共有し、どう教育活動に結びつけていくのかが問われます」

「ところで“自家発電”って何?」と広報担当者が問うと、「何がいつ起きるのか分からない時代。どのような問題が起ころうとも自分で考え、対処する力が必要です。自己研鑽を怠らず、省察と経験の中で実践力を培って欲しいという意味です」

北口教授は、長年の養護教諭や行政でのキャリアがあり、その経験を踏まえた言葉には説得力があります。中でも、学校現場に新任で赴任した時に「こんなはずでは?」と大きなギャップを感じることもあるといわれます。大学では現場のニーズにマッチした専門職としての知識技能を培うカリキュラムや「卒後研修会」等での卒業生支援も必要です。最後に「教えた学生が、学校現場で生き生きと頑張っている姿は何よりも嬉しいものです。いまは後進を育てることに専心しています」と語りました。





なぜ大学教員になられたのですか？ と、広報担当者の質問に、「ひとりでいいますと、“魅力にあふれた力量のある”教師を育てること。教員養成大学の教員であるわたしの使命であると考えています」とにこやかに応えてくれました。

「では、特別支援教育における“力量のある教師”とはどのような？」と問うと、日本の特別支援教育をめぐる現状と課題、展望について語る言葉は立て板に水でした。「障がい理解教育は“コヘルニクスの転換”を迫られている」。そして「これから教師になろうとするすべての学生、現職教員はこのことをしっかり受け止め、学習し、授業を設計し、日常的に実践していかなければなりません」

「障がい者の権利条約」(2007年3月国連採択)の批准が日本でもタイムテーブルに上がっています。正式に批准されれば、インクルーシブ教育が学校教育法に明記され、様々な特別なニーズのある子どもたちが在籍している、全国の幼小中高校でこれまで以上に対応を迫られるのは日を見るより明らかです。「特別支援学校のセンター的機能を生かしながら、すべての幼小中高校の教師が意識的、組織的、方法的にインクルーシブ教育に取り組んでいくことが求められます」と強調します。

カナダを発祥とするインクルーシブ教育は、通常教育と特別ニーズ教育の一体化をめざした教育で、その推進は国際的に後戻りのできない流れとなっています。富永教授は、推進の先頭に立っています。

同教授は、現在51歳。広島県内の知的

障がい養護学校の教諭として勤務後、広島大学の助手を経て、1991年度から本学の教員となりました。スイス・ドイツの特別ニーズ教育、各学校種の特別支援教育の授業づくり、高等学校への知的障がい生徒の受け入れ、大学のユニバーサル・デザイン化、知的障がい児の環境教育、病弱教育をはじめ様々な領域を専門にしています。そして、最近ではインクルーシブ教育を研究し、各方面に提唱・発信しています。

研究者となった原点は大学時代にあるといいます。

広島大学教育学部の時代から10年近く、日赤の学生奉仕団として、孤児や犯罪・虐待等親に課題を抱えた子どもたちの“養護施設”でボランティアをしました。また、学部2回生から大学院修士・博士課程の時代まで、肢体不自由養護学校の寄宿舎で管理指導員・非常勤寮母としてほぼ週2回勤務し、寝泊まりで生活指導や食事・着替えの介助を行っていました。「そこで出逢った障がいのある生徒たちとの交流が、学生を指導する立場になったわたしの宝となっています。彼らは一人ひとり個性的で多くの葛藤を抱えています。今は、障がい者作業所の所長をやっていたり、何人かが結婚し子どもも生まれていますが、かけがえのない仲間・友人です。本音でかわり続け、泣き笑いのエピソードは尽きません」

学校現場での経験があり、その視点からの見方もできることから、現在、学校現場からの指導依頼が数多く寄せられています。「最新の捉え方(理念)、制度、教育内容・方法

をふまえ、現場の先生方との共同研究、授業研究の機会が多くなりました。特に、ユニバーサルな授業づくりや新しい視点に立った障がい理解教育を現場に提唱しています」

インクルーシブ教育では通常教育自体をもう一度問い直し、特別支援教育との一体化をすすめるために、通常教育と特別支援教育各々の教師、各々の研究者が一緒になって取り組みを進めることがポイントです。教職をめざす学生に対しても、「特別支援教育の中に教育の根本的なものを見つけることができます」とエールを送ります。

「子どもたちは障がいの種類や重さなど、一人ひとり違うし、育った環境も様々。一人ひとりにしっかり対応していかなければいけません。逃げたり、手を抜いたり表面的に接してはだめ。子どもたちは教師の意図をすぐに見抜きます。そうすると、信頼関係はどうして作ることはできません。それは健常児といわれる子どもと対するときも同じ。その子の将来を真剣に願い、本音でやりとりする教師であってほしい」。その信頼関係がベースにあって、クラスづくりや授業づくりなど専門的な教職技術が生かされるといいます。

また、学生時代には障がい児のボランティアなどに積極的に参加してほしいといいます。「教員だけではどうしても狭い世界に陥ってしまいます。医師や看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、ケースワーカーなど教育以外の様々な専門職の人や保護者と連携することが重要ですが、学生時代にボランティアを経験することで、このような人たちと一緒に取り組むことも可能です。視野も広がるし、こういう捉え方があるのかと幅も広がります」。現在、東日本大震災の被災地での障がい児ボランティア活動でも、学生は多くのことを学んでいるといいます。最後に、尊敬する障がい児教育・福祉の実践家、近藤益雄氏の言葉で締めくくられました。…何事においても「のん気・こん気・げん気」の3つの“気”を大切にしてほしい!...



STUDENTS NOW!

橋川 望(はしかわ のぞみ) さん

学校教育専攻 心理学コース
大学院1回生



大阪市では不登校の子どもたちの居場所として各区に設置されたサテライトと、中央区森ノ宮(旧アビオおおさか内)に中央通所A・B・Cの3か所の通所ルームを開設しています。いずれも不登校の子どもたちのサポート機能を果たしています。通所AとBは心理的なアプローチ、通所Cは教育的アプローチによって子どもたちと関わるという違いがあります。広さは小学校の教室程度です。橋川さんら将来教職やカウンセラーなどをめざす大教生4人が交代で担当しています。部屋には、ギター、ホワイトボード、本棚、卓球台などが備えてあります。

橋川さんは平成22年度から通所Cのスタッフとなりました。毎週月曜日、午前10時半から午後4時まで担当しています。来所する中学生は10人前後。活動の内容は、学習の補助、歌や遊び、お話、卓球などです。

「ひと口に不登校といっても一人ひとり事情は異なります。それぞれ、担当の人との距離



不登校の子どもたちのサポート活動

指導員のみなさんと

感も違います。学力についてもばらつきがあり、学習指導も一律ではありません。身近に接することで、その子が何を求めているのかのニーズを把握し、自分たちに何ができるのか、一緒に考えていくようにしています」

スタッフは学生以外に2人の指導員がいて、3人体制です。「わたしたちが活動で感じたことを伝えと、職員の方々もすぐに返していただけます。毎回、事前の情報交換、事後の振り返りなど、丁寧なかかわりのための話し合いに時間をかけています」と橋川さん。

大教生の多くが学校サポート活動など一般校にインターンシップで活動していますが、「不登校に悩んでいる子どもたちがいることを、学生の時代に体験しておくことは大きな意義があると思います。少人数なので子どもたちの

反応がダイレクトに伝わりますから」

活動してよかったと思ったことは?「最初は下を向いて目も合わせられなかった子どもたちが、だんだん落ち着いてきて、顔を上げてきます。そして、何かをきっかけに変わっていきます。互いの信頼感が増したとの感触をつかんだときですね」

コーディネーターの大谷眞砂子さんは「学生さんは、子どもたちにとっては憧れの存在で、身近なロールモデル。橋川さんは子どもに添う時の呼吸や感覚が優れた人で、安心して任せられる心強い存在です」と語ります。さらに「不登校になった当初は、どの子どもも自信をなくして、人との関係にとっても過敏になっています。学生さんたちも、いつ、どのように関わるか難しい時期を経験します。見守るしんどさもあります。その日々の積み重ねのなかで次第に、あるいは突然子どもが変化を見せてくれます。教師になる前に、この子どもの持つ力を目の当たりにする体験を是非してほしいです」と、大谷さんは教職をめざす学生に期待します。

その子が何を求めているのかのニーズを把握し、自分たちに何ができるのか、一緒に考えていくようにしています



ギターが得意な橋川さん、子どもたちに操作をアドバイスしています。

今年度「科研費」の新規採択数が36件

継続を含めると74件に交付されています。

■平成23年度科学研究費補助金採択一覧

研究種目	所 属	研究代表者
基盤研究B	教員養成課程 学校教育講座教授	白井 利明
基盤研究B	教員養成課程 家政教育講座教授	岡本 正子
基盤研究B	教養学科 自然研究講座教授	辻岡 強
基盤研究C	名誉教授	馬場 則夫
基盤研究C	教員養成課程 家政教育講座教授	織田 博則
基盤研究C	教員養成課程 家政教育講座准教授	山田 由佳子
基盤研究C	教員養成課程 音楽教育講座准教授	北川 純子
基盤研究C	教養学科 欧米言語文化講座教授	松本 マスミ
基盤研究C	教養学科 社会文化講座准教授	今里 悟之
基盤研究C	教養学科 社会文化講座准教授	西村 貴裕
基盤研究C	教養学科 人間科学講座教授	新崎 国広
基盤研究C	教員養成課程 学校教育講座教授	戸田 有一
基盤研究C	教養学科 人間科学講座教授	石橋 正浩
基盤研究C	国際センター准教授	中山 あおい
基盤研究C	教員養成課程 音楽教育講座教授	小島 律子
基盤研究C	教員養成課程 家政教育講座准教授	鈴木 真由子
基盤研究C	教員養成課程 数学教育講座教授	馬場 良始
基盤研究C	教養学科 情報科学講座准教授	守本 晃
基盤研究C	教養学科 情報科学講座教授	藤井 淳一
基盤研究C	教養学科 自然研究講座准教授	久保埜 公二
基盤研究C	教養学科 健康生活科学講座教授	碓田 智子
基盤研究C	教養学科 健康生活科学講座教授	岡本 幾子
挑戦の萌芽研究	教養学科 芸術講座教授	滝 一郎
挑戦の萌芽研究	教養学科 社会文化講座准教授	渡邊 昭子
挑戦の萌芽研究	第二部 実践学校教育講座教授	森田 英嗣
若手研究B	教養学科 人間科学講座准教授	高嶺 裕樹
若手研究B	教養学科 日本・アジア言語文化講座准教授	中野 知洋
若手研究B	教員養成課程 学校教育講座准教授	小松 孝至
若手研究B	教員養成課程 学校教育講座准教授	臼井 智美
若手研究B	教養学科 芸術講座准教授	江藤 亮
若手研究B	教員養成課程 英語教育講座講師	生馬 裕子
若手研究B	教養学科 自然研究講座講師	乾 陽子
研究成果公開促進費	教員養成課程 特別支援教育講座教授	富永 光昭
研究成果公開促進費	教員養成課程 社会科教育講座准教授	峯 明秀
若手研究B	教員養成課程 学校教育講座講師	小林 将太
新学術領域研究 研究領域提案型	教養学科 自然研究講座准教授	鈴木 剛

大学における教育研究充実のメルクマールともいえる本学「科研費」(科学研究費補助金)の平成23年度申請・採択状況が確定し、新規課題の採択数は36件で、前年度からの継続を含めると8件増の74件となりました。採択率も21.9%から40.0%に急増しました。

「科研費」とは、人文・社会科学から自然科学まですべての分野にわたり、独創的・先駆的な学術研究を進展させることを目的とする文部科学省の研究助成費です。

新規の採択課題には、基盤研究(B)や新学術領域研究など高額な採択も数件含まれ、研究の今後の展開が注目されています。平成23年度科学研究費補助金採択一覧は表のとおりです。

研究課題名	研究期間
成人期のアイデンティティ再構築に関する生涯発達心理学的縦断研究	平成23～26年度
「子ども虐待防止の実践力」を育成する教員養成のあり方	平成23～25年度
低表面ガラス転移温度を有するフォトリソミック膜表面における金属原子の挙動	平成23～25年度
非定常環境におけるオートマトンの学習—ソフトコンピューティングの有効活用に向けて	平成23～25年度
機能性UVカット剤を用いた環境材料(衣料・生活用品)のエコ化と身体防護性能付与	平成23～25年度
乳幼児ズボンのウェスト構成と圧迫による身体影響に関する研究	平成23～25年度
浪曲三味線の「手」の史的形成過程に関する研究	平成23～25年度
英語中間交替の視点による日・英語自他交替における生成文法と外国語教育の融合的展開	平成23～25年度
村落耕地の極微細地名における地域差および集落差とその自然的・社会的条件	平成23～26年度
ドイツにおける自然保護制度・思想の変遷——ナチズム期とその前後を中心として	平成23～26年度
学校・施設を基点とする新しい福祉・教育コミュニティ構築に関する研究	平成23～25年度
多様なピア・サポート実践の相互対照群モデルによる評価	平成23～25年度
投影法課題実行時における認知処理の脳科学的基盤を求めて:fMRIによるアプローチ	平成23～25年度
学力向上政策における移民の教育に関する比較研究—ドイツとスイスの事例から—	平成23～25年度
学力形成に寄与する伝統文化教育の義務教育9年間の和楽器教材プログラム開発	平成23～25年度
消費文化に対する子どもの関わり方の実態とリスク—消費者教育の教材開発—	平成23～25年度
アルチン環の研究	平成23～27年度
ウェーブレットによる空間スケール解析を用いた画像分離	平成23～25年度
作用素不等式と周辺分野への応用	平成23～25年度
光機能性材料を検出部位とする新規超分子型アニオンセンサーの開発	平成23～25年度
歴史博物館の建築展示を活用した体験型住教育プログラムの構築	平成23～25年度
コミュニケーションツールとしての生活環境色彩の戦略的導入と展開	平成23～25年度
アナロジーの美学—ベルクソンの「美学講義」をめぐって	平成23～25年度
異宗派間の婚姻—近代ハンガリーにおける制度・議論・個別事例	平成23～25年度
国際的な態度形成に影響を及ぼす留学経験の比較研究	平成23～25年度
図書館利用記録の秘密性(confidentiality)についての現代的研究	平成23～24年度
戦後初期台湾における民族主義文学の成立と展開—梁実秋を中心に	平成23～24年度
幼児・児童の表現における記号的媒介過程に着目した自己の発達理論と教育実践との接続	平成23～26年度
外国人児童生徒教育における教員研修教材の開発	平成23～26年度
言語表現に於けるリズムや間を応用した視覚伝達デザインの教材開発	平成23～24年度
発達段階にふさわしい音声言語教育のための小学校英語活動教材開発とカリキュラム作成	平成23～25年度
好蟻性昆虫がアリ社会に侵入するための多様な化学的戦略	平成23～26年度
ハインリッヒ・ハンゼルマンにおける治療教育思想の研究—スイス治療教育の巨匠の生涯とその思想の特色	平成23～23年度
社会科授業改善の方法論改革研究	平成23～23年度
L.コールバーグのジャスト・コミュニティにおける授業実践の研究	平成23～24年度
同一種内異種ゲノムが引き起こすインセスト回避と生殖隔離の分子機構	平成23～27年度

東日本 大震災 支援

「未曾有の大震災で被災している障がい児とその保護者を支援したい」。特別支援教育教員養成課程の学生と教員は、熱い思いをひとつにして4月11日、「東日本大震災被災障がい者支援プロジェクト」を立ち上げました。

活動として、5月には本学新入生歓迎行事の「五月祭」で展示会を開き、会場では、被災障がい者の状況を伝える新聞記事の掲示、啓発用に制作したクリアファイルを販売し、売上金の一部を特別支援学校の被災障がい児支援のために充てました。

夏休み期間の8月3～12日まで、学生5人と特別支援教育講座の金森裕治教授と冨永光昭教授、附属平野中学校の池永真義教諭、附属特別支援学校の長澤洋信教諭が被災地に行き、障がいがある子どもの学童保育等に取り組みました。主な活動場所は岩手県下閉伊郡村にある特定非営利活動法人・障がい者作業所ハックの家で、被災障がい児のデイクアサービス及び保護者のレス



参加学生、楠さんにインタビュー



この夏、特別支援教育の学生が
現地で被災障がい児支援の
活動を実施



バイトケアに協力しました。「レスバイトケア」とは乳幼児や障がい児・者、高齢者などを在宅でケアしている家族を癒やすため、一時的にケアを代替し、リフレッシュを図ってもらう家族支援サービスのことです。

また、宮古・釜石・大船渡地区の特別支援学校3校、岩手県教育委員会、特別支援教育エリアコーディネーターへの聞き取り調査を実施しました。その結果、「障がい児とその保護者や各種学校教員が大震災後の環境の中、がんばりを強いられ、心の面での支援が必要」「自閉症の子が大きな声を出しても、これまでは家の壁が遮ってくれた。パニックになっても買いそろえたおもちゃで気分を変えられた。今は、すべてが津波で流され、子どもたちも家族もストレスの中にある。だから、障がい児を預かり保護者の負担を軽減するデイサービスが早急に必要」「災害時における障がい児の学校安全マニュアルが必要」などの課題が明らかになりました。

計画段階から、受け入れ自治体や特別支

援学校、ハックの家関係者などと折衝に当たった冨永教授は、「震災発生から6か月、ようやく子どもたちの問題に目を向けていかなくはという段階になってきました。わたしたち教員養成大学の役割が今こそ問われています」と語っています。

報告書によると、参加した学生のすべてが活動してよかった、将来教師になるのにプラスとなったと感想を述べています。各特別支援学校の先生、ハックの家の所長から、大阪教育大学の学生への感謝のビデオメッセージを受け取りました。今後、プロジェクトでは、11月の大学祭などにおいて、被災障が

い児等支援活動の報告、被災地の人のビデオメッセージや津波ビデオ記録を公開し、被災地の特産物等の紹介も行う予定にしています。

この事業は、本学の平成24年度概算要求プロジェクト「インクルーシブ教育に対応する教員養成推進プログラム」採択へ向け弾みにもなる取り組みで、今後、附属学校等とも協力しながら、被災地の様子や被災した障がい児の状況を子どもたちに伝える教材づくり、授業実践を行う予定です。また、災害時における被災した障がい児の学校安全マニュアルも作成する予定です。



ユ一 「教職をめざすうえで貴重な体験」「しんどさを抱える子どもたちに目を配る教師に」

参加ボランティア学生のリーダーとして活動した楠敬太さん(大学院2回生)にインタビューしました。

一活動の概要を教えてください。

楠 小学生から高校生まで毎日10人前後が参加していました。障がいの種類は様々で、聴覚障がい、自閉症、ダウン症、知的障がい、重度肢体不自由児、医療的ケアが必要な病弱な子どもたちなどです。

一活動を始めての第一印象は?

楠 子どもたちはみんな元気で明るいということです。実施主体のNPO法人が事前に問い合わせを行っていき、子どもたちの好きな映画のDVD、ゲームソフトなど、遊ぶ道具が備えられていました。そして、お兄ちゃん、お姉ちゃんのような学生ボランティアが、一対

一で対応してくれるので嬉しかったのだと思います。

一なにかエピソードは。

楠 元気な女の子と、水鉄砲で遊んでいた時、全身びしょ濡れになって、「津波と同じや」とぼつりと漏らしたのです。

ああ、そうなの。この子たちは、表面は元気で明るく見えても、心に深い傷を抱えているのだ。何かのきっかけで、フラッシュバックでつらい体験が蘇ってくることがあるのだと。そのことを決して忘れてはいけないと戒めました。

一今後、教師となるに当たって、この体験をどのように生かされますか。

楠 一緒にボランティアした仲間と話したことは、自分の子どもができたとき、復興する前と復興後の現地の様子を、次の世代に伝え

ていこうということです。もちろん、自分が担任した子どもたちに対してでもです。また、同じようにボランティアで行けなくてもできることはあります。岩手県には観光名所や物産がたくさんあります。遠い大阪にいても、経済的な面から支援する方法はいくらでもあります。

一高校の頃、パラリンピックの水泳で国際的に活躍した両腕に障がいのある選手の講演を聴いて感動したことで、特別支援学校の教員をめざしたという楠さん。カンボジアでも子どものボランティアをした経験もあるそうです。

楠 過酷な環境にあっても子どもたちは元気で明るい。心にしんどい現実を抱えている子どもたちに目を配ることのできる教師でありたい。機会をつくって今後ともボランティアは続けていきたいと思っています。



FOR STUDY



「第11回小学校英語教育学会(JES)大阪大会」 全国から2日間で延べ840人が参加

『小学校外国語活動元年』がスタートしたのを受け、先進校の歩みに学び、10年後をめざして生き生き取り組む外国語活動を提案しようと、「第11回小学校英語教育学会(JES)大阪大会」が7月17・18日の両日、本学・柏原キャンパスで開催され、2日間で延べ840人が参加しました。

各教室に分かれた会場で、1日目は課題研究発表、ビデオ公開授業、ランチオンセミナー、自由研究発表、講演会を実施。2日目は自由研究発表のほかワークショップ、シン

ポジウムなどが多彩に繰り広げられました。テーマは、必修化された外国語活動の指導とカリキュラム、『英語ノート』の活用、奈良市のAPEC子ども大使の実践、こども英語落語への挑戦、英語絵本によるストーリーテリング、ワールドカフェ方式の校内研修、英語教育リーダー育成のための研修など、小学校英語教育の導入にともなって浮かび上がった課題に答えるため、全国の学校現場での先進的取り組みが盛り込まれていました。また、ATR CALL(コンピューター支援語学

学習)やVersant(口頭英語能力測定試験)を活用したICT体験コーナーも用意されました。各会場では真剣な表情でメモをとる教員や学生の姿が見られました。



北アルプスの雄大な自然を満喫



スキー部 遠藤 侑希さん提供

遠見山の家にて



ジャンプ競技場



参加者意見交流会



大学構成員の垣根を超えた情報交流 「学生生活研究セミナー兼山の家活用研究会」を初めて白馬村で実施

「平成23年度学生生活研究セミナー兼山の家活用研究会」が、9月5・6日の両日、長野県北安曇郡白馬村にある本学宿泊施設の「遠見山の家」で開かれました。このセミナーは、「遠見山の家」の活用計画について、研究することを目的に実施されました。本学教職員と学生計29人が参加し、「遠見山の家」の歴史や白馬村との連携について学習するとともに、新たな活用法について意見を交わしました。

現在、「遠見山の家」は本学スキー部や宇宙科学研究会が毎年利用していますが、大学構成員の利用が年々減っています。そこで、「遠見山の家」の新たな活用法を探ろうと教職員と学生による宿泊交流が企画されました。セミナーでは、本年度から、「地方の小

規模校における教育実習」の現場として「長野県白馬村立白馬南小学校」での体験実習に参加する学生の宿泊施設として活用されることが報告され、注目されました。そのうえで、今後はサークルだけでなく、新しい利用方法を検討していくことが申し合わされました。

参加者は、長野オリンピックの白馬ジャンプ競技場など周辺施設を見学、雄大な自然を満喫しました。サークルの代表として参加した学生は「施設のことがよくわかりました。今後、活動のうえで有効活用していきたい」、芸術専攻音楽コースの学生は「白馬村でコンサートを開催できたらいいな」と感想を述べていました。

学生支援実施委員会副委員長の太田順康教授は「各部局の教職員と学生たちが垣根を超えて有意義な意見交流が行うなど素晴らしいセミナーでした。これをきっかけに今後はサークルだけでなく、本学の教育活動にかかわる新しい利用方法の議論を深めてほしい」と話していました。





CAMPUS REPORT

オープンキャンパスに約5,300人が参加
授業体験、学科説明、学生演技など多彩に



大阪教育大学のオープンキャンパスが7月31日(日)、柏原キャンパスで開かれました。炎暑の中、約5,300人の高校生、保護者、留学生などが参加しました。

教員養成課程、教養学科及び第二部の教育・研究内容を各専攻に分かれて本学教員が説明する専攻等紹介、「生物多様性・いのち教育・小論文の書き方」を題材にした模擬授業、入試アドバイザーによる大学概要説明、大学紹介ビデオ上映などを行いました。また、受験生対象相談コーナー、在学生とのフリートーク・クラブ紹介コーナー、留学相談コーナー、外国人留学生対象の説明会などが実施されました。

在学生によるイベントとして、屋外で「いちやりばちよーでエイサー隊」が沖縄の伝統舞踊「エイサー」を、創作舞踊「凜嬢」(りんどう)が「よ

さこいソーラン」の演舞を力強く発表し、参加者からさかんな拍手が送られました。「モダン科学館」では簡単な実験を通して身近な物理について教材展示で紹介し、科学に関心を引き付けました。学生広報「DAIKYO PRESS」のメンバーによるフリーペーパーの配布と活動紹介が行われたほか、美術棟では学生の作品が展示され、音楽棟リハールホールでは、教養学科芸術専攻音楽コース学生のオーケストラによるミニコンサートも開催され、参加者はクラシックの美しい音色に聴き入りました。

食堂やカフェでは、高校生らが大学側の配布した案内資料に真剣な表情で目を通し、体育会クラブの学生が案内するキャンパスツアー、学内施設見学が繰り広げられました。



附属学校園ウォッチ

故 岩崎由紀夫氏を悼む

本学教育学部教授(実践学校教育講座)、附属天王寺小学校長の岩崎由紀夫氏が7月16日、急逝されました。享年61歳。

専門分野は美術教育学、児童造形論。第二部小学校教員養成課程(天王寺キャンパス)で教鞭を執る一方、小学校の管理職としての業務もこなされていました。また、専門の美術教育学、児童造形論の分野でも学会等に所属、牽引車の役割を果たされていました。

突然の訃報にご遺族はもちろん、友人・知人・同僚ら関係者の驚きは大きく、通夜、告別式(同17日)には延べ1,400人が参列しました。

広報室では、大学の後輩であり日本教育美術連盟で役員として共に活動していた今西榮氏(門真市立北巢本小学校長)、附属天王寺小学校副校長の八木義仁氏に追悼文の寄稿をお願いしました。

(広報室)



【故 岩崎由紀夫氏の御経歴・業績(概略)】

昭和24年8月10日生まれ。昭和47年3月大阪教育大学教育学部卒。63年3月本学大学院教育学研究科修士課程修了(教育学)。

48年東大阪市立縄手北小学校教諭を振り出しに、51年附属平野小学校教諭、同副校長を経て、平成10年教育学部助教授(実践学校教育講座)、17年同教授、20年から附属天王寺小学校長(併任)。

この間、日本教育美術連盟、美術家教育学会、全大阪教育美術振興会等の役員を歴任し、美術教育の学術振興に寄与されています。著書・論文は図画工作、美術教育分野を中心に60点あまりを数えます。この中には、小学校図画工作科の教科書編集も含まれています。

なお、在職中の功績が認められ、平成23年8月12日の閣議決定で、叙位叙勲が決まりました。叙位については正五位(しょうごい)、叙勲については瑞宝小綬賞を受けました。



「これは、本当なのか?」という気持ちで

門真市立北巢本小学校長 今西 榮

7月16日に友人から電話があった。何気なく受話器を取ると、岩崎先生がケガをされて緊急入院されたとのこと。手術は、成功と聞いたので、安心していたら、また電話が鳴り、その瞬間、時間が止まってしまったことを今でも鮮明に覚えている。

教育実習でお世話になって以来、36年間のお付き合いであり、これからも永く続くと思手に考えていた。日本美術教育連盟の理事長として、美術教育学会の役員として、これからの図画工作教育をまさに導いてくださると誰もが疑わなかった方が突然去られ、支えを失い言葉も失った。「これは、本当なのか?」

実際に岩崎先生の棺を持ち、お骨を拾い、満中陰にも出席させていただいたが、まだ、ふっと先生の「君なあ! もうちょっと考えてみい(見てご覧)!!」という声が聞こえるようでどうにもやりきれない。今は、岩崎先生が安らかに眠られることを祈るのみである。



岩崎由紀夫校長先生を偲んで

附属天王寺小学校副校長 八木 義仁

今年の臨海学舎は、これまで同様、細心の注意をはらって実施しました。無事終わることができ、少しほっとした翌日、岩崎校長先生は突然逝ってしまいました。私も先生方も子どもたちも、何の心の準備もできずお別れしなければならなくなりました。

「これからは強い附属を創らない」という言葉をくり返しおっしゃっていた岩崎先生。先生は、かつて附属平野小学校の副校長もされていたので、附属のことをとてもよく考えてくださっていました。

附属天王寺小学校長としての3年4ヶ月、先生は、さまざまな種をまいてくださいました。そして、水やり、肥やしを与え、大きく育てようとされてきました。若い人にチャンスを与え、示唆し、活躍できるように導いてくださいました。その芽はまだ吹いたばかりです。これからというときに残念でなりません。

先生には多くのことを教えていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがたうを伝える術(すべ)は見つかりませんが、私たちに今できることは先生の志を受けとめ、大阪、近畿、日本の拠点校となるべく、研究教科の指導力を磨くことだと考えます。

来年2月の研究発表会の日には、会場のどこかで見ておられることでしょう。



附属学校園ウォッチ



附属高等学校天王寺校舎SSHが 科学技術振興機構理事長賞に輝く 火星表面の研究を生徒が発表

本学附属高等学校天王寺校舎は、8月11・12日に神戸市内で開かれた「平成23年度スーパーサイエンスハイスクール（SSH）生徒研究発表会」（文部科学省、独立行政法人科学技術振興機構＝JST＝共催）



で、JST理事長賞に輝きました。

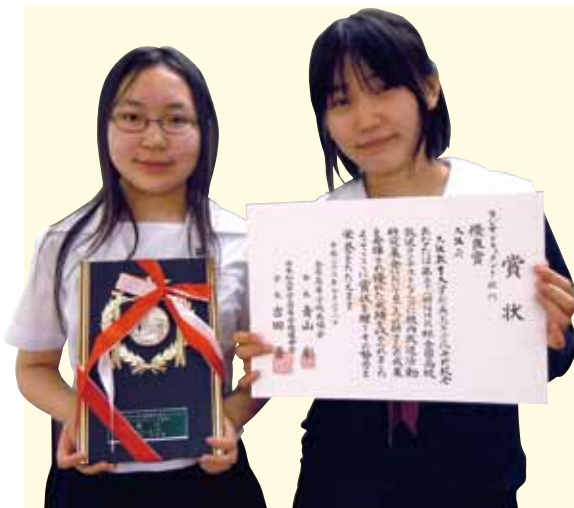
SSHの生徒による研究発表を行い、生徒の科学技術に対する興味・関心を喚起するとともに、その成果を広く普及させ、研究事業をさらに推進するのがねらいです。発表会には、全国のSSH指定校141校、指定経験のある学校1校の代表生徒・教員及び一般参加者、2日間でのべ3,700人が参加しました。

附属天王寺校舎からは4人の生徒が参加し、口頭発表、ポスター発表を行いました。JST理事長賞は、口頭発表の中から選ばれ、最高賞の文部科学大臣賞に次ぐ権威ある賞で今年は全国から2校が選ばれました。



研究テーマは「火星表面年代＝あばた×えくぼ」とユニークで、発表は同校地学部の中嶋菜衣さん（3年生）、小林修平さん（2年生）、尾澤ちづるさん（2年生）の3人が担当しました。火星表面の、とりわけ若い溶岩流やランパートクレーターと呼ばれる特殊なクレーターの形成年代を、「クレーター年代学」を応用し、火星表面衛星画像よりクレーターのサイズ－個数分布を計測することで推定した研究です。

また、ポスター発表は、3年生の工藤亜美さんが担当。大阪弁を交えた元気な語り口が参加者の関心を引き付けていました。中嶋さんらは受賞の喜びを「大きな舞台で発表でき、賞を頂けて大変光栄です。発表は何よりも『わかりやすさ』に重きを置いたのですが、その点が評価されてとても嬉しいです。今後この貴重な経験を生かして様々なことに取り組みたいと思っています」と語りました。担当の岡本義雄教諭は「大学や研究機関などと強く連携した研究が多い中、自分たちの地道なクラブ活動の延長でこのような研究ができたのは意義がある」と話しています。



附属高等学校平野校舎 コミ研が全国大会で優良賞

附属高等学校平野校舎のコミュニケーション啓発研究会（コミ研）が制作したラジオドキュメント『たった一音だけ...』（制作：福村沙紀・榎原新奈）が、7月に東京で開かれた第58回NHK杯全国高校放送コンテスト全国大会でベスト10に入る優良賞を獲得しました。

大会には全国から1,613校、1万5,888人の学校・生徒が参加し、このうちラジオドキュメント部門への参加は全国から407作品集まり、各県の予選を通過したグループの中から選ばれました。福村さんらは「全国大会では、さらに高いレベルの作品や発表をたくさん見ることができました。今後の活動に生かしていきたいです」と話しています。

詳細は附属高等学校
平野校舎ホームページへ。

<http://www.hirano-h.oku.ed.jp>

—本学教員を招き、平野地区附属校園で研修会を実施—

校名等	日付・時間	場所	発表名	研究内容	お問合せ電話
平野五校園	11月5日(土) 9:00～16:50	附属平野 小・中・高・特・幼	平野五校園 共同研究発表会	「生涯発達の視点に基づく校種間連携型一貫教育」 ”ことば・体験・コミュニケーション”で「考える力」を育てる保育・授業創り	06-6709-1230 (附属平野小学校内 事務局)
附属天王寺中学校 高等学校天王寺校舎	11月12日(土) 9:30～16:00	同校	第58回 教育研究会	「チャンスとチャレンジのカリキュラム2011」 発表教科:国語・社会・数学・英語・技術家庭・道徳	06-6775-6052 -6053
附属池田小学校	11月26日(土)	同校	第3回関西体育 授業研究会	「授業力向上～子どもがいきいきと学べる教材と 教師の言葉かけ～」	072-761-3591～3

てんゆうツイッター

天遊twitter

この平成23年度及び平成24年度以降において予定された連携事業に要する要求予算がどのように査定されるかはわかりませんが、いずれにしても、今後この三つの教員養成大学の連携・協力による諸活動・事業の実施は必須になると思われます。（理事・岩川雅十 9月30日記）

天遊vol.19アンケート

●本号でよかった記事を下から選んでください。
(3つまで。その他は具体的にお書きください。
【 】【 】【 】
(その他

- ①東日本大震災学習支援ボランティア学生座談会
②ひと最前線 ③ラボ訪問
④STUDENTS NOW! ⑤科研費採択一覧
⑥特別支援教育課程の学生による被災地支援
⑦FOR STUDY ⑧CAMPUS REPORT
⑨附属学校園ウォッチ ⑩TOPICS

●取り上げてほしい記事がありましたらお書きください。

●本誌をお読みになってのご意見・ご感想などをお聞かせください。

●次号以降も広報誌『天遊』の送付を希望される方は記載をお願いします。

〒
ご送付先
.....
ご芳名
.....
お電話番号

※お預かりした個人情報(住所・氏名・年齢・性別・電話番号・メールアドレス)は、広報誌「天遊」の送付以外には使用致しません。

01 サブサハラ英語圏の 理科研修プログラムが 本学で実施



「平成23年度英語圏サブサハラアフリカ理科授業評価改善」事業の一環としてJICA(ジャイカ、独立行政法人国際協力機構)と本学による共同実施の研修プログラムが、9月6日から30日まで繰り返し行われました。

サブサハラ英語圏と呼ばれるアフリカ・サハラ砂漠の南にある発展途上国の教育の向上に寄与することを目指して、JICAからの

要請を受け、昨年度から始まった事業です。今回は7か国(エチオピア、ガーナ、ケニア、マラウイ、ナイジェリア、ウガンダ、ザンビア)から国家教育機関の専門官、指導官、指導主任 など13人が参加しました。

一行は、大阪府内の小学校や中学校に出向いて理科の授業を見学、指導教員らと意見交換、日本の学校給食も体験しました。プログラムの最後には、授業案の個別指導や模擬授業、評価会も行いました。

02 学生広報 「DAIKYO PRESS」が オープンキャンパスで フリーペーパーを作成・配布

本学の学生で構成されている学生広報グループDAIKYO PRESS(大教プレス)が7月31日(日)のオープンキャンパスに合わせてフリーペーパー「DAIKYO

PRESS」真夏号(第3号)を発行しました。

このフリーペーパーは本学を訪れる高校生向けに企画、編集されました。たくさんの学生の写真を使用し、各課程・専攻・コースのイメージカラー調査など、大学の様子が分かるように工夫されています。

フリーペーパーを手にした高校生は「行きたい学科が掲載されていて、とてもためになった。ますます大教に進学したいと思った」と話していました。なお、次号(第4号)は、神霜祭発行に向け準備を進めています。



に送付いたしました。その反響として保護者の皆さまから、アンケートはがきが返送されています。

これまで、154通にのぼっていますが、そこには、本誌に対し、様々なご意見が寄せられていました。

vol.17では、「よかった記事」として、「卒業生Catch」(94件)がトップで、次いで「就職に強い大学をめざす」(90件)、「YOU CAN DO IT」(69件)と続き、ご意見欄にもキャリア支援や就職指導について取り上げてほしい記事に挙げられており、学生の進路や就職活動、現役学生、卒業生の活躍に強い関心が示されました。また、vol.18でも同様の傾向がうかがえました。

誌面デザインやレイアウトについては多くの方から「写真がきれいで文章もわかりやすい」との評をいただいています。広報室では、読者アンケートに示された保護者のみなさまの声を受け止め、今後の誌面づくりに生かしていく所存です。

(広報室)

料金受取人払郵便

柏原支店
承認

29

差出有効期間
平成24年4月
20日まで

切手不要

郵便はがき

5 8 2 8 7 0 5

(受取人)

大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

大阪教育大学管理部企画課

広報室行

03 広報室から

小誌「天遊」では前々号(vol.17 春号)、前号(vol.18 夏号)の本誌を、在学生の保護者一人ひとり



本誌にご意見をお寄せください。

広報室では、今後の誌面作りに皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと考えています。ご感想やご意見、大阪教育大学についてお知りになりたいことなどを、はがきまたはwebアンケートでお聞かせください。

天遊vol.19
webアンケート



「天遊」とは

「天遊」は、荘子の言葉から引用されたもので、人間の心の中に自然に備わっている余裕をあらわしています。キャンパス統合移転の記念に旧師範学校以来の同窓会3団体から寄贈された記念碑に銘文として刻まれています。記念碑の揮毫は、水嶋昌(山耀)本学名誉教授によるものです。



本紙は再生紙を使用し、環境にやさしいベジタブルインキで印刷しています。この印刷物は、16,000部を950,800円で、すなわち1部59.4円で作成しました。



※該当する番号を○で囲んでください

あなたのご所属を教えてください

- | | | |
|----------|---------|-----------|
| ①本学関係者 | ②高校生 | ③小学校教員 |
| ④中学校教員 | ⑤高等学校教員 | ⑥教育委員会関係者 |
| ⑦他大学教職員 | ⑧他大学学生 | |
| ⑨その他 () | | |

①と答えた方は以下から該当する番号をお選びください

- | | | |
|---------|----------|----------|
| ①学生 | ②大学教員 | ③大学職員 |
| ④大学保護者 | ⑤大学卒業生 | ⑥附属学校教員 |
| ⑦附属学校教員 | ⑧附属学校保護者 | ⑨附属学校卒業生 |
| ⑩名誉教授 | ⑪その他 () | |